

氷室作太夫家住居を再発見する プロジェクト かわら版

第 4 号
H29. 11
発行/津島の
宝物ひろめ隊
津島市本町 1
丁目 26 番地

●プロジェクトの内容

津島の宝物広め隊は、まちの地域資源は津島の宝物と考えその魅力を広める活動をする市民活動団体です。

「氷室作太夫家住居を再発見するプロジェクト」は、津島市の「つしま歴史・文化のまちづくり提案補助事業」の採択を受けて実施しています。氷室作太夫家住居は市の文化財指定を受けていますが、損傷部分があるためか、通常、一般には公開されていません。

そこで、氷室作太夫家住居の価値や魅力を再発見（再認識・再評価）し、利活用案とそのために必要な整備案を取りまとめて、市民の皆様始め、一般の方々に発信する活動を進めていきます。

皆様のご参加をお待ちしています。

●活動報告 (11/11)

平成 29 年 11 月 11 日 (土) にプロジェクトの第 4 回目を開催し、事務局を含め 14 名の参加がありました。



今回は、愛西市佐織公民館館長の石田泰弘氏を講師としてお招きし、「史料から垣間見る氷室作太夫家について」お話をいただきました。石田氏は 7072 点にも上る氷室家文書の中にあらわれる氷室作太夫家の活動や現在の氷室邸の建築年などについてな話を頂くことができました。

●石田講師のお話～一部を紹介します～

- ・神主氷室家を筆頭とする社家の序列が決まっていた。
- ・氷室作太夫家は、氷室光太夫家（序列五番目）から分かれておこった。
- ・作太夫家の檀那場はこの地域では、現在の海部郡や稲沢市、一宮市にまたがる広い範囲であった。
- ・作太夫家は序列的には下位の方だったが、幕末には他の御師の檀那場を買い取り、相当な財力を持っていた。
- ・作太夫家住居が天王川の東側にあったということは非常に謎である（当時の天王川東岸は、20軒の旅館が立ち並んでいるほど栄えていた）。
- ・作太夫家住居の図面は安政 2 年 5 月のものが残っているが、なぜか同時期に異なる図面が二枚ある。
- ・棟札によると嘉永 2 年 10 月が作太夫家住居の建築年となっているが、それを裏付ける他の史料等がなくさらには建前などの記録も残っていない（嘉永 2 年の棟札は増築がされた際のものではないか？）。
- ・濃尾地震で作太夫家住居も大きな被害を受けており、おそらくその際に神様を祀る場が失われ、住居だけが残っているのではないか。
- ・津島は江戸期には観光地であり、旅行史の観点から面白い研究結果が出てくるのではないか。

●まとめ

石田先生は作太夫家住居についてはまだまだ研究が十分でなく、立地や建築年について不自然な点が多くあることを紹介されました。今回のお話から作太夫家住居は津島の歴史において重要な建築物でありながら、謎が多い建物であることがわかりました。これから今まで知られていなかった津島の歴史について研究が進められる際に手掛かりとなる場として、今後氷室作太夫家住居の存在は重要となってくるのではないのでしょうか。

●次回のお知らせ

次回の 12 月 9 日 (土) は津村泰範氏 (長岡造形大学建築・環境デザイン学科准教授) をお招きします。講師とご一緒に氷室作太夫家住居の見学会 (現地集合: 午後 1 時 30 分～) も開催します。講演会「歴史的建造物をまちづくりに活かす」(津島まちや・まちなみ再生機構事務所の 2 階集合: 午後 3 時～) では、各地の歴史的建造物に携われた豊富な経験と研究する講師から、他の地域との違いや特徴についてのお話をお聞きして氷室作太夫家住居について再度認識して保存活用の重要性を知る貴重な機会になると思います。参加希望者は 090-4257-0011 もしくはメール: info@tsushima-machiya.net 迄。

氷室作太夫家屋敷敷図

氷室作太夫家の史料群の中に、安政五年に描かれた「屋鋪図」(図1、2)がある。これらを現在の図面(図3)と比較すると、氷室作太夫家住居の建物の変遷を考えることができる。

図1
氷室作太夫屋鋪図
安政五年二月
(津島市所蔵)

本図は母屋の西側の建物(長屋、付属屋など)の建設のために描かれたと思われる屋鋪図。

右図の中央に描かれる建物が母屋。本図では母屋と長屋の間に付属屋が描かれているが現存しない。

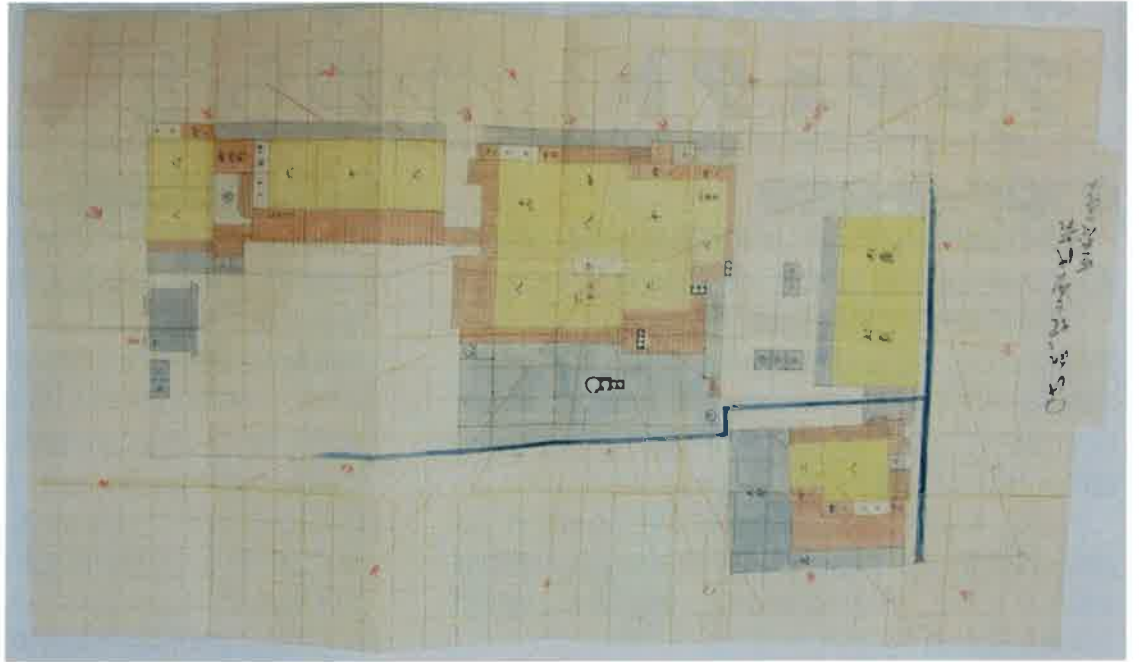


図2
下書 屋鋪図
安政五年二月
(津島市所蔵)

本図は母屋の西側の建物の建設のために描かれた構想図。
図1とは異なる図が描かれている。

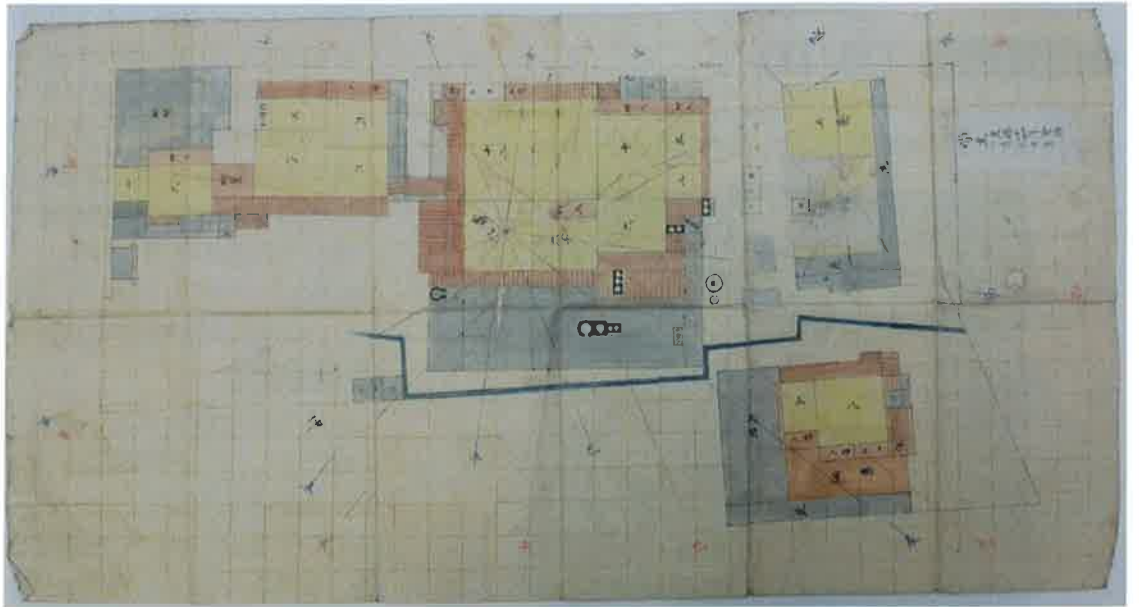


図3
氷室作太夫家住居
図面(現在)

